

中国電影大観



青島アパートの夏 (站直囉、別趴下 / Stand Up, Don't Bent Over)

2007(平成19)年11月23日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督＝ホアン・チェンシン黄建新 / 出演＝フォン・ゴン馮鞏 / チャン・ルー張路 / ニウ・ヂェンホワ牛振華 / フエ・リョーリ傅麗莉 / ター・シーチホン達式常 / リウ・シヤキオイ劉小恵 / シユイ・ルー徐路 (東光徳間配給 / 1992年中国映画 / 117分)

第3章

忘れていた何かがここにある

……小泉改革では「守旧派」があぶり出されたが、改革開放政策の中、青島のアパートの住人たちの間では……？ 対立軸は、共産党幹部の劉とヤクザまがいの起業家の張。そしてそこに絡むのが作家の高。面白いドタバタ劇と笑うばかりではない社会風刺がチクリ、チクリと……。中国特有の問題点を面白く切りとった黄建新監督の手腕に拍手！

■ 始まりは引越し、終わりも引越し

この映画は引越しに始まり引越しに終わるが、引っ越してきたのは高文カオ・ウエン (馮鞏フォン・ゴン) とその夫人 (張路チャン・ルー) の2人。高文は推定年齢50歳くらいの作家だが、高夫人はまだまだ若く美しい。しかし、子どもはいない。そこで「晩婚だから子どもはいらないんです」と高夫人は語っていたが、それが本心かどうかは微妙……？

高夫婦がこのアパートの1階の部屋に引っ越すことができたのは、やっと抽選に当たったためらしい。この映画は1992年の製作で、時代設定も同時期。そして、今や中国一美しい都市として人気ナンバー1の青島が舞台だから、鄧小平による改革開放政策の恩恵をいっぱい受けたはず。したがって、アパート (日本の言い方ではマンション) に入るくらいは容易なのではと思っていたが、アパートへの入居が認められた高夫婦の喜びようをみているとそうでもなさそう。したがって、2人が喜々として引越し先のアパートに向かったのは当然だが、面白いのは自転車の荷台に家財道具を載せて引越ししていること。もっとも、入居するときはそうだったが、出ていくときはトラックになっていたから、その間改革開放が進みかつ高夫婦もリッチになった

らしい……？

区分所有法制定の効用は……？

住宅の主流が戸建て住宅から集合住宅（マンション）に移行していく中、日本では昭和37年に区分所有法が制定された。また、同法は昭和58年に①区分所有建物の管理の充実を図るため、区分所有者は「管理を行うための団体」を構成することを明らかにするとともに、「管理者」の権限を強化し、②共同生活の維持を図るため、区分所有者が共同の利益に反する行為をした場合は、その者の専有部分の使用の禁止等を求めることができる、とする大改正を行った。これは、この映画にみるような「無法者」の横暴に対抗するためだ。しかし、いくら制度をつくっても、騒音を中心とするマンション居住に伴うトラブルは増加する一方。つまり、良好な人間関係、隣人関係がなければ同一マンション内に住むのは難しいということだ。

やはり隣人調査が必要……？

高夫婦が引越し作業の最中に聞かされたのは、左隣の部屋の住人張永武チャン・ヨンウー（牛振華ニウ・チェンホワ）はトラブルメーカーであること。そのうえ行動が粗暴だから、その暴力行為により隣人は足をへし折られ、こりゃたまらんと出ていってしまったらしい……？ また、高文カオ・ウェンの右隣の部屋の住人である共産党幹部の劉（達式常ター・シーチャン）と劉夫人リウ・シャオホイ（劉小恵）は、その後釜に高夫婦が入居してきたのを喜んでいたが、それは高夫婦の入居が張とのトラブルのクッション剤になると見込んだため。

張は劉が共産党の幹部として甘い汁を吸っていると思い込んでおり、逆に劉は張がヤクザまがいの粗暴な男だと嫌っているから、2人の仲は最悪。そのため、何と劉の部屋のドアは張の攻撃から防御するため鉄板で補強されているらしい。そんなバカな、と思っていると、高夫婦が引っ越してきた翌日、たちまち高夫婦はひどい目にあつたうえ、張は大声でわめきながら大きな棍棒カオ・ウェンで高文の部屋のドアをたたいていたからビックリ……。

改革開放？ それとも旧秩序の維持？

作家の高文カオ・ウェンはインテリだから、きっと文化大革命の時代（1966～76年）は苦勞したはず。しかし、彼が現在どんなものを書き、どのように評価されているのかについ

て映画は何も明らかにしないから、現在の彼の政治的立場や主義主張は不明。しかし、いかにもひ弱そうでいつもオドオドしている姿を見ていると、きっと現在はどっちつかずの立場で風見鶏……？

こんな新入居者に対して、2人の旧入居者の立場は鮮明。すなわち、共産党の政治幹部である劉は、旧秩序の維持のみに価値を見出している共産党がすべての旧体制派。したがって彼は、これからの激動の時代を生きていくには不向き……？ 他方、ヤクザまがいの張はワケがわからないなりに改革開放政策の支持者だから、変革の時代を生きていくのに向いてそう……？

新規事業の立ち上げは……？

今では中国共産党も企業経営者を党員として受け入れているが、昔は企業経営者＝資本家は敵と考えられていたもの。しかし、改革開放政策が進む中、共産党が会社（会社）の結成と事業の立ち上げを奨励する状況に。

それに乗って熱帯魚を飼育して販売する事業を立ち上げたのが張。あんなヤクザまがいの奴が……、と劉はその失敗を願っていたが、張は意外に勉強家かつ働き者、そのうえ熱帯魚の気持がよくわかる（？）とみえて、張の商売は順調に拡大していったからビックリ。この映画は、そんな張の事業の立ち上げと成功を軸として、面白い人間模様が描かれていくから、まさに中国のあの時代特有の人間ドラマとして興味深い。

劉の戦術は……？

劉の家には一人娘劉美（徐路）リウ・メイ シュイ・ルーがいたが、彼女はなかなか父親の期待どおりには育っていないよう。そのうえ大学受験にも失敗したから、父親からはボロクソに。チャラチャラした娘に育ったのは一人っ子政策の弊害かもしれないが、その判断の基準をどこにおくのかは難しいところ……。

このように父と娘の対立は激しいが、そんな父と娘との「人民内部の矛盾」は「敵対的矛盾」である劉家と張との対立に比べれば、解決可能なもの……？ そこで「人民統一戦線」を組んで共通の敵に向かうべく編み出した戦術は、劉美リウ・メイをスパイとして張の会社に送り込むこと。あんなに儲けているのはきっと何かカラクリがあるはず。そのカラクリを暴いて密告すれば張はおしまいだと考えたわけだが、さてそんな戦術はうまく功を奏するのだろうか……？

張は意外にいい奴……？

ネット情報によれば、この映画を監督した黄 建 新ホアン・チェンシンは、『黒砲事件』『スタンド・イン』『輪廻』『王さんの憂鬱な秋』『張込み』など、中国の現代社会を風刺を効かせたタッチで数多くの作品を発表しているとのこと。また、『黒砲事件』は官僚主義批判の映画と評価を受けたとのこと。そんな黄 建 新ホアン・チェンシン監督だけに、この映画では、当初ヤクザまがいの粗暴なだけの男と思われていた張が意外といい奴で、逆にエリート風の共産党幹部の劉が意外といやらしい奴だったという構図になってくるところがミソ……？ 新商品がいっぱい展示されているデパートで張が気前よく劉 美リウ・メイの洋服を買ってくれたり、ディスコに連れて行ってってくれたりする中、劉 美リウ・メイはすっかりスパイの仕事を忘れて(?) 大はしゃぎだが、それは劉 美リウ・メイがまんまと敵の計略に落ちてしまったせい……？ タダでモノを買ってくれるはずがない。これはひょっとして……？ 思わず劉 美リウ・メイの母親劉夫人はそんな邪推をしたうえ、それをそのまま口にしてしまったから大変。劉 美リウ・メイは一大決心をして病院に行き、「ある診断書」を両親に提出するまでに。もちろん、こうなれば例の人民統一戦線もおじゃんとなり、劉 美リウ・メイは張の養竜魚公司を辞めてしまうことに……。

いつの間にか劉も

張の商売に不正を発見できなかった劉が次に考えたのは、養竜魚公司に卸しているエサの販売権を独占すること。そのためには池を管理している党の幹部の協力が必要だが、それは劉にとってはお手のもの……？ もちろん、そんな小細工が張にバレたら困るのだが、その点は……？ そんなこんなの計略が入り乱れながら、よく考えてみると、劉は今や張の事業の敵ではなく協力者に……。こりゃまさに、民が官を打ち破り、改革開放路線が大成功したということか……？

なぜ、ラストにまた引越しを……？

この映画は引越しに始まり、引越しに終わるが、それは隣人同士のトラブルのため日本の区分所有法が定めるような手続で誰かに退去命令が出されたためではなく、任意の話し合いによるもの。ネタばらしになってしまうが、書いておかなければ私も忘れてしまうので少し説明すれば、それは張の事業の拡大のため。

事業は順調に拡大し、今やビルを構えるようになった張は、青島の名士たちを招いたパーティーを開き意気揚々。したがって、張の住居についてももっと贅沢な部屋に移ってもいいのだが、張にとってこのアパートは縁起のいい場所だから動きたくないらしい。そこで出された張の提案は、高文カオ・ウエンに対してここよりいい部屋を提供するからそこに引っ越してくれという何とも虫のいいもの。当然高文カオ・ウエンもそんな勝手な……と思ったはずだが、提供された代替物件を見ると、これが予想以上の優良物件。ここにも張の気前の良さがよく表れているが、これはちょっと出来すぎかも……？

経済成長がみんなを幸せに……？

この映画は高文カオ・ウエンが青島アパートに引っ越してきてから、また引っ越していくまでのひと夏を描くものだが、映画の始まりと終わりで人間模様が一変していることに驚くはず。映画のラストは、張のせいであれほどいがみ合っていた青島アパートの住人たちが庭に集まって記念写真を撮るシーンだが、ここに写る住人たちの表情はみんなうれしそう。すると、高文夫婦カオ・ウエンが引っ越してきた時にみた、劉と張の対立は一体何だったのだろう……？ 3度の失脚から奇跡の復活を遂げた鄧小平が、1977年以降打ち出したのは経済政策の重視で、これがその後の改革開放政策に繋がっていった。日本では経済成長のカゲで失われたものがたくさんあることが指摘されているが、1970年代後半から80年代、90年代にかけての中国は経済成長による貧しさからの脱却が人間の幸せをもたらすものと考えられ、それが国家政策とされた。

この青島アパートにみる高、劉、張を中心とする人間模様を見れば、そんな経済重視政策が結果的に大成功だったことがよくわかる。つまり、張の起業とそれによってもたらされた経済的豊かさによって、張はもちろん劉も高もその恩恵を受け、みんながハッピーになることができたわけだ。

今後の課題は……？

経済成長を続けてきた中国は今、水不足や大気汚染、食料不安や農地の収用、さらに党や政府幹部の腐敗・汚職等々の問題点を抱え、その解決策を模索している。それと同じように、この青島アパートにも、今後新たな問題点が生まれてくるはず。張や劉はこの「ひと夏の経験」が終わった後、それらの問題の解決に向けてどのように立ち向かっていくのだろうか……？

2007(平成19)年11月28日記